

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

パウロ・キョウゼン



医僧パウロ・キョウゼンの出身
とされる多武峰（談山神社）

府内病院で薬剤調合の医書著す

「豊筑乱記」という軍記物に、享祿3（1530）年の豊後臼杵に南蛮の「大船」が着岸し、「絹布・薬種」（中国の絹織物と漢方薬の原料）をもたらしたとあります。ポルトガルからの

船が中国の漢方薬剤を持参したとの、興味深い内容です。大友義鎮（宗麟）の政策の下で「よき医師」が育成され、周辺地域に比して医療技術が発達していた豊後では、伝統的な漢

方（中国式医薬学）に加えてヨーロッパの医療も展開しました。系統の違う両医学は、16世紀の日本でどのように融合したのでしょうか。

豊後府内（大分市）に、日本初の西洋式病院を開設したルイス・デ・アルメイダについては以前に紹介しました。永祿2（59）年11月、府内滞在中のパードレ（司祭）バルタザール・ガゴが記した手紙（ポルトガル・リスボンのアジュダ図書館蔵）には、府内病院で「用いられている外科治療は、イルマン・ルイス（ルイス・デ・アルメイダ）の指示に従って、私達の（ヨーロッパの）方法で「行ないま」す」と記されています。

一方、内科治療については、この病院で働くパウロ・キョウゼンという人物の記述が注目されます。「治療には二つの方法があり、すなわち、外科と内科です。なぜなら、ミヤコから一人の日本人が山口にわざわざやって来て、パードレ（コスメ・デ・トルレス）がパウロ（Quigen「キョウゼン」）という名のキリスト教徒にしたからです。この者は僧侶や偶像と

共に生活し育てられました。が、修道生活が性にあって、当地豊後へとやって来ました。（中略）この者はかつて医者で、病に罹っていた時、書物の中にあつたいくつかの薬（の調合）を著しました」。

「パードレ（トルレス）は、彼等の薬の「調合をする」練習をしました。それらはシナに由来し、二人の中国人「が著した」これら二冊の書物は学ぶのに容易であり、様々なものに効きます。飲むとすぐ三日熱や四日熱に作用するものがいくつかあり、同様にその他あらゆる病気に効くものもあります」（「イエズス会日本書翰集」訳文編3）。キョウゼンは、奈良多武峰（談山神社）の医僧（医学知識のある僧侶）です。山口で改宗し、洗礼名パウロとして府内病院を訪れて薬剤調合の医書を著述。その医薬知識は中国のもので、調合した薬は解熱、その他の病に有効だったとの大意です。府内病院では、アルメイダによる外科治療と、キョウゼンの医薬書による内科治療という、西洋・東洋の両医学による治療と施薬がなされていたことが分かります。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授） 11月1回掲載